



響



特別号

学びの改革実践校
ミーティング特集 No.1

令和3年1月29日(金)



学びの改革実践校から学ぶ 未来に生きる子どもたちの学びをどうするか

今年度、これからの社会を見据えたシステム改革や授業改革に取り組もうとする学校を支援する「学びの改革実践校応援事業」がスタートしました。今回、各校のご協力のもと「学びの改革実践校ミーティング」を開催し、授業公開や懇談会を通して、学び合うことができました。動き出している学びの改革の取組から、各校の次年度に向けた学校運営の参考にしていただければと思います。

「問いを生み、自分なりの解決方法で、 自分なりの答えにたどり着く探究」 川上中学校

- ・「正解が1つに慣れている生徒」から「自分で答えを見つけられる生徒」を目指します。探究する力=生きる力と考え、探究を進めます。
- ・「なぜ川上村のレタス栽培が日本一なのか」理由を考え、調べ、ゲストティーチャーに聞き、発表し、新たな課題と出会いながら、村や自分の未来について考えます。



川上中学校ではどのように探究を進めてきたのですか？

探究って何だろう？ ゼロからのスタートで変わっていく生徒たち

川上中学校の2年生の生徒は、多くの家庭がレタス栽培と関わりながらも川上村がレタス栽培日本一だという事を知りませんでした。川上村という小さな村が本当に生産量日本一だという事実に触れ、生徒はこの村を「奇跡の村」と呼びました。「なぜ？」という疑問に対して、「気候」「土の性質」「農業実習生」「働き手」「レタスの質」など、それぞれが興味をもった観点ごとに少人数のグループで調べていきました。

最初に地域講師に会ったときには、各班が調べてきたことを順に発表し、時間を区切って順番に地域講師を回るという形式的な活動でした。しかし、そこで新たな視点を得て、変わっていきます。収穫量の多い札幌市や坂東市の「気候」を比較した子どもたちは、両市の共通点がレタス作りに



「さあ始めるね」で動き出す生徒



「お願いします」と自らプレゼン



「お話を聞かせてください！」

適した気候であることや、それぞれの地域の特徴を活かしていることをつかみ、発表内容に自信をもちます。プレゼンテーションの練習では、参観された先生方に「聞いてください」と積極的に声をかけて発表し、意見交換をします。そして、指摘された点について、すぐにこれからどうするかを話し合い、さらによりよい発表へ工夫しようとする姿が生まれました。川上中の生徒たちは、自分たちの課題解決に向けて、目的をもって何をどうしていくか考え動くという、意欲的な姿に変わってきました。

また、先生も変わってきました。この日の授業は、課題が決まっている生徒たちに先生は、「さあ、始めましょう」と授業を始め、授業の最後は「新しい視点がもたらえたね」と先生は締めくくりました。学びの主導権を生徒に預けることで、自分で答えを見つけられる生徒の育成を目指しています。

職員もみんなで考え合う

川上中では、コロナ禍のケーブルテレビの授業配信に向けて、どうしたら自律的な学びを支援できるか、内容や方法を先生方が実際の授業を受けながら考え合いました。また、探究や自由進度学習の試行を行い、授業の在り方をみんなで話し合ってきました。校長先生も一緒になって、先生方と何度も何度も話し合いながら、学校の授業や生徒の姿を語り合いました。その中で、先生方の目指す生徒像が共有されていきました。



なぜ、この「探究」に取り組んできたのですか？



学ぶことの価値を感じられる生徒たちに

川上中では全職員で自校生徒の課題を確認しました。農家を継げば良いと考えている生徒も多く、学ぶ意欲をもちづらい傾向があることが見えてきました。生徒たちが、学びの個別化や「探究」を通して、学ぶ価値(将来の役に立つこと)を実感できる授業を行っていくこと目指していくことになりました。

川上中学校の主な取組

- 6月:全職員で課題を確認し、目指す授業像を共有→「ゆるやかな協同性」に支えられた「学びの個別化」
- 7月:「学びの個別化」(探究・単元内自由進度学習)の実践・成果と課題の共有
- 8月:「探究を探究する会」講師:前早稲田大学教授 露木和男先生より→「問いを生む授業づくり」を
研究主任:「探究を実現し、学校を変え、生徒の変容を促すには、教師が変わることである」
- 10月:中2生「レタス」について、総合的な学習の時間を核に教科横断的に探究を進める

<実践校ミーティング参観者の感想より>

- 学びの主導権を子どもたちにゆだねるという取組、とても勉強になりました。プレゼン発表後に、もっと良くなる視点を二人でじっくり考え、話し合っていました。
- テーマに対してリアルな「問い」を設定したことが探究として大切だと感じました。
- 生徒が課題意識をもって追究し、つまずき、プレゼンし、新たな課題を発見し、次の追究に向かおうとしていた。今求められている「学力」を的確に捉えて実践につなげている。
- 「探究」とは何かについて、職員間で学び、一致団結して進めていることがうらやましい限りです。

川上中の取組から、「学び」をどう捉えるのかについて、職員も探究しています。「自分なりの答えにたどり着く力」のために、校長先生とともに、職員が一つになって試行錯誤しています。探究を通してどのような授業を行って行くかについて全職員で歩み続けている川上中学校です。

「中学校区をつなぐICT活用と授業の充実」 小海中学校

- 日常の授業でのICT活用を進めています。「一人一台タブレット」導入の中、その難しさや効果的な活用方法を研究しています。
- 中学校区の小中連携と授業でのICT活用あり方を研究しています。



小海中学校ではどのようにICT活用に取り組んできましたか？

全教科、全職員の活用に向けた取組

小海中の先生方は、日常的なICT機器の活用を目指し、ICT推進リーダーとともに各教科でどんな活用ができるか研究を進めてきました。大型電子黒板や、タブレット PC、デジタル教科書等を活用しながら教師主導から生徒主体の授業への転換を目指しています。

[表：各教科でのICTの日常的な活用例]

国語	デジタル教科書や取材時のタブレットの活用
英語	自作ソフトでのランダム発音練習や遠隔会話
美術	教師示範動作や生徒モデル作品の拡大提示
保健	タブレットで撮影した動画で実技の振り返り

午前中授業をもたない推進リーダーは、各教科各教室を巡回訪問し、機器の使い方や設定、有効活用の方法などを気軽に声をかけながら、活用推進を図りました。その結果、表のように、教科の特性を活かした使い方を共に実践することを通して、日常化を図りました。そこには、推進リーダーの気さくな人柄と、常にリクエストに最善の方法で応えようと努力する姿があったと聞いています。困ったときにすぐ質問ができ、各教科の効果的な使い方を共に考え、推進リーダーを核に活用を押し進めていきました。

その結果、大型テレビやタブレット PC を使ったが授業が日常的に行われています。保健体育のダンスの授業では、生徒が動画を繰り返し再生して揃わない部分を確認したり、英語の授業ではパワーポイントで示された課題を自分で答えて次の課題に進んだりしています。小海中では、ICT機器をどう使うと、生徒が自ら考え、表現し、かかわり合う授業になっていくかを授業の中でもICT推進リーダーと先生方で振り返りながら研究を進めていきました。

ICTを活用した、生徒主体の授業に向けて

先駆実践教科に位置づけた社会科では、中部横断自動車道について、「南佐久地域にどんな影響を与えたのか？これからどうしたらよりよい道路になるのか？」について考えました。生徒は、家族や地域の方へのアンケートをもとに現状や課題、希望などを分析しながら、自分たちの考えをm町に提案したいという目標をもって取り組みました。

その中では、全員のレポートを生徒がタブレット PC で自由に読んだり、グループの意見や考えをタブレット PC 上の地図に書き込んで大型電子黒板に映し出して共有したりしました。「立ち寄って



友のレポートをじっくり読み合う



意見を出し合う、メモを書き込む



大型モニターに映し出し共有化

もらえる特産品の販売ができる道の駅やカフェをつくる」「松原湖の景色が見える SA をつくる」など、地図上に書き込んだ設置場所の位置や提案コメントを指し示し、異なる考えを出し合いながら考えていきました。

<実践校ミーティング参観者の感想より>

- 学校体制として全職員でICT活用に向かっている姿があり、新しい教育現場の実態を学ばせていただきました。
- 全体会もリモートで行う先進的な取組でした。大型の電子黒板の効果を実感しました。ICT推進リーダーを中核に、整備、運用を進めてくださり職員の意識が高まっていることを感じました。
- 職員研修を重ね、使ってみる、やってみることが大切だと感じました。ICT活用が目的ではなく手段としてどう使うべきか研究を重ねている点について学ばせていただきました。



ICT 活用が小中でつながるためにどのような取組をしていますか？



ICT を活用した学びの連続を

小海中では教師主導型の授業からの脱却し、予測不能な社会を逞しく生きていく子ども育成に向けて、ICT をツールとした主体的・対話的で深い学びの実践を目指してきました。そのために、ICT 推進リーダーを中核とし、小学校から体系的・系統的にICT を活用していくことの重要性を感じていました。

小中の連続的な ICT 活用の促進

ICT 活用がスムーズにつながるように、中学校区全小学校との ICT 教育推進リーダー会議、合同研修会などを行い、環境整備や授業活用の充実を図ってきました。そして、各町村教育委員会とも連携しながら、必要な機能を見据えた小中共通で使える機器の選定も行ったりしてきました。

また、コロナ禍にあり、例年行っている小学校 6 年生の中学体験ができなかったため、生徒会役員や中1生が3校の小6生とオンラインでつながる遠隔交流を進めました。この中で、中学校生活の紹介や動画視聴、質疑応答をしたり、音楽会では生徒・児童合同のオンライン合唱を行ったりしました。小海中の ICT 推進リーダーは各小学校へも出向きながら、小学校から中学校への連続的な ICT 活用を促進してきました。

小海中学校の主な取組

- 中学校区でつながる遠隔合同学習・活動・交流（児童・生徒・教員）
 - ・教育委員会とのニーズに合った機器の選定
 - ・機器の同一化
 - ・中学校区のICT教育推進係会
 - ・ICT推進リーダーの配置
 - ・先進校の視察
 - ・ICT活用研修、メディアリテラシー研修の充実
- 教員主導の一斉授業から生徒主体の協働・課題解追究型の授業
 - ・自ら考え、表現し、かわりあって活動することを通した、わかる授業の実現に向けた研修・研究会
 - ・日常的なICT活用を図る（各教科での実践事例の蓄積）

小海中では、一人一台のタブレットPCが導入され、先生方がICTをどう活用するかを推進リーダーとともに考え、生徒がどうICTを活用できるようになるかを目指しています。「まずやってみる」からスタートし、どの教室、どの教科でも、ICTを活用して実践を積み重ねています。推進リーダーの果たす役割の大きさと、全職員が前向きに取り組んでいることが、小海中の生徒を育てています。

「多層指導モデル MIM から個別指導の充実」 上田市立東小学校

- MIM の継続的指導から「読みの力」に関わるつまずきを軽減させ、教室の落ち着きを生み出す実践を積み重ねています。
- MIM の授業や個別の指導法について、実践を積み重ねています。



上田市立東小学校ではどのような授業が行われていますか？

MIM を活用した「読み」の指導充実

上田市立東小学校では、MIM 推進教員が中心となって、小学校1, 2年生の全クラスで MIM の指導を行っています。学習を支える「読みの力」について、つまずきが大きくなる前に、より効果的な指導・支援となるよう、月に1回、実態を調べるアセスメントを行い、個々の子どもに分かりやすい指導を行っています。

[表：ステージ別 MIM 指導一覧]

ステージ	対象	指導
1stステージ	すべての子ども	通常学級での効果的な指導
2ndステージ	1stのみでは伸びが十分でない子ども	通常学級内での補足的な指導と配慮
3rdステージ	1st, 2ndステージでは伸びが乏しい子ども	集中的、柔軟的な形態による特化した指導

東小学校では、1stステージや2ndステージ指導として、推進教員と学級担任が連携し、学級内での全体指導で、動作化や視覚化を取り入れながら、必要に応じて個別に補足的な指導を行っています。3rdステージの中でも授業中「読み」で苦しんでいるだろう児童を保護者の同意のもとで個別・少人数指導しています。

3rdステージ少人数の授業では、「きゃ・きゃ・きゃべつ、きゅ・きゅ・きゅうり、…」とみんなで楽しく声を出しながら拗音の単語をリズムよく読んだり、「ねっこ」のような小さい「っ」の入る言葉を、ね(手拍子)っ(グー)こ(手拍子)と体を使って練習したり、個別に「ほべた」や「てぺん」のどこに「っ」が入るのかを確かめたりします。自分でできたことを先生や友だちに認めてもらったり、どれが正しいか「ろっと、よっと、やっと」と自分で問題づくりにチャレンジしたりして「できた」と自信をつけていく姿が見られました。



「ねっこ」：パン・グー・パン



たくさん問題作れたね！



たくさんの言葉を示した掲示物

<実践校ミーティング参観者の感想より>

- 教職員間の理解や研修などの準備、保護者への説明や個別学習への承諾、児童へのアセスメントの実施などたくさんのハードルを越えて取り組まれている様子がよく分かりました。
- 3rdステージの児童への指導の在り方や、時間の確保の仕方等参考になりました。
- 授業だけでなく、教材準備や廊下の掲示などから学校全体で取り組んでいることがよく分かりました。アセスメントだけで終わるのではなく、それをどう指導していくのかその具体が見られて良かったです。



どのような体制で、MIM の指導が行われていますか？



推進教員を中核に連携して、安心した学びを

「読みの力」につまずきを感じながら、学校生活を送っている児童も多くいます。MIM の継続的な指導から、児童が安心して落ちついた学びができるよう、MIM 推進教員を中核に担任と関わりながら、全体指導と課題となる個別指導の充実を図る必要性を感じていました。

学級全体への指導や、環境整備などは、MIM 推進教員を中心に低学年の先生方が協力して行っています。個別・少人数指導は、ドリルの時間や、音読テストの合間などに行っています。連携はMIM の指導だけではなく、学年会でこの子が今なぜ落ち着かないのかを考えたり、次の単元では教科でこういった取り組みをしてはどうかと提案したりしながら、学年で協力して行われています。こんな中で、アセスメントの結果にステージの変化が表れていることや、学習面での落ち着きを感じられるようになったことに手応えを感じています。また、子どもたちも、先生方も言葉を意識して大切に扱ったり、楽しく言葉を使っていこうとしたりしていることが伝わってきました。

MIM 推進教員はフリーで動けるため、市内の学校への研修会や授業参観・指導にも複数回訪問しながら、「読み」の改善につながる各校の実践につなげていこうとしています。

上田市立東小学校の主な取組

○アセスメントから個別指導へ

休校中：6クラス分の教材作成、1年間のアセスメント用紙の印刷

6月～：月1回のアセスメント開始（小1、2年）、単元にあわせてMIMの方法での特殊音節の学習

10月～：3rdステージ指導開始（保護者の同意を得て、ドリルの時間に）

○環境整備

・ひらがなやカタカナのこぼれカードを掲示、こぼれの広場のコーナー設置

・学級文庫の充実（読みに自信がない児童のために「こどものとも年少版」などを配置）

・職員用・保護者向けのお便りを発行

○市教委と連携した研修会の実施

・市内小学校へ出向き、授業や研修会、参観、懇談などの支援を実施し、活用教材の準備や配布

・上田市の教職員ポータルサイトに、保護者向けのパンフレットや、指導計画、教材・教具等の紹介、質問事項などへの回答などをアップ

「なぜこの子は分からないんだろう」と感じることはあっても、「読み」のつまずきとつなげて考えることは、あまりなかったように思います。MIM を用いてアセスメントを活かしながら、継続的に「読み」の指導を行っていくことの重要性を感じます。子どもたちの安心や落ち着き、学びの意欲につながっていく上田市立東小の実践に学びたいです。

学びの改革実践校では、「どのような子どもたちを育てるか？」という問いに対して、校長先生のリーダーシップのもと、方向性を打ち出して、全職員がそこに向けて取り組んでいます。「何をするか？」には多くの方法ややり方がありますが、「自分で学ぶ力を付けていく」ことを共有して学びの改革に向かっていることを実践校の訪問から強く感じます。そして、「何をするか？」の答えを議論する前に「まずやってみて考える」姿勢で、先生方が協力して前向きに動き出し、試行錯誤する姿こそが、『学びの改革』のスタートではないかと感じています。